

東奥日報

2019年(令和元年)10月24日(木曜日) (16)

新校舎に要望あれこれ 小中学校ワークショップ

中泊



原案の模型を見ながら新しい学校のイメージを膨らませた児童たち

中泊町はこのほど、2022年春の開校を目指している「なかとまり小中学校(仮称)」に児童の意見を反映させるワークショップを小泊小学校で開いた。参加した5、6年生27人は新校舎完成時に中学生として利用することから、「(無料の無線LAN)WiFiが欲しい」などと校舎、設備への要望を述べていた。同町は現在の小泊小学校と小泊中学校を統合し、同

小隣接地に小中一貫校の整備を進めている。ワークショップは、新たな学校に教職員、児童・生徒の意見を反映させるもので、7月から同日まで4回にわたって開催してきた。最終日は、児童たちが話し合いをリードするファシリテーターの小藤一樹・八戸工業大学准教授、馬渡龍・八戸工業高等専門学校准教授らのアドバイスを受けながら、校内で使う看板のデザインや「かけこや」と名付けた小さなスペースの

利用方法についてアイデアを出し合った。看板のデザインでは、ウスメバルやイカなど町の名産品を挙げた。また、小さなスペースに「一部目隠しが欲しい」「動物と触れ合

いたい」「カーペットを敷いてほしい」などと希望を述べた。6年の青山聡真君は「新しい学校が楽しみ。みんな楽しく学校生活ができるように話し合った」と振り

返った。ワークショップを終えた小藤准教授は「今の5、6年生が新しい学校ではみんなを引っ張っていく立場になるので、その子たちの意見を反映させたい」と述べた。(三浦博史)